

『釧路湿原および周辺の地層』

『釧路湿原および周辺の地層』では、教科書で紹介している「水のはたらきでできた地層」を中心に、釧路湿原や周辺の丘陵地、海岸部で見られる地層を紹介しています。

資料『釧路湿原および周辺の地層』について

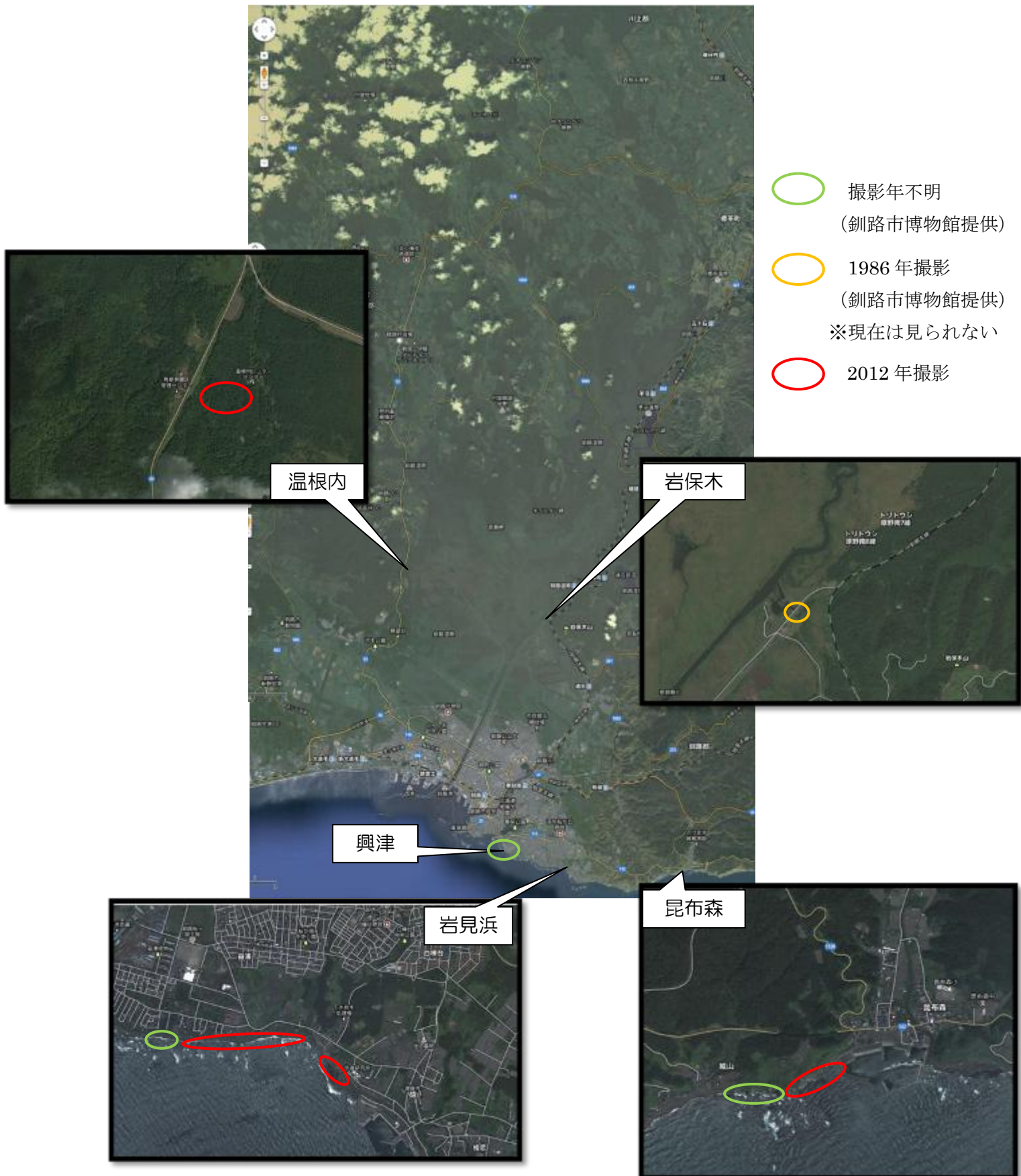
資料概要：以下の資料をとりまとめました。用途に合わせてご利用ください。

- 1) 釧路湿原および周辺の地層の写真データ5ヶ所
(場所ごとにフォルダを区分しています。地層マップを参考に活用ください。)
- 2) 釧路湿原および周辺の地層マップ
- 3) 『釧路湿原および周辺の地層』についてのトピック

1) 釧路湿原および周辺の地層の写真データ5ヶ所

- ①鶴居村温根内
- ②釧路町岩保木
- ③釧路町昆布森
- ④釧路市岩見浜
- ⑤釧路市興津

2) 釧路湿原および周辺の地層マップ



3) 『釧路湿原および周辺の地層』 についてのトピック

(解説：釧路市立博物館)

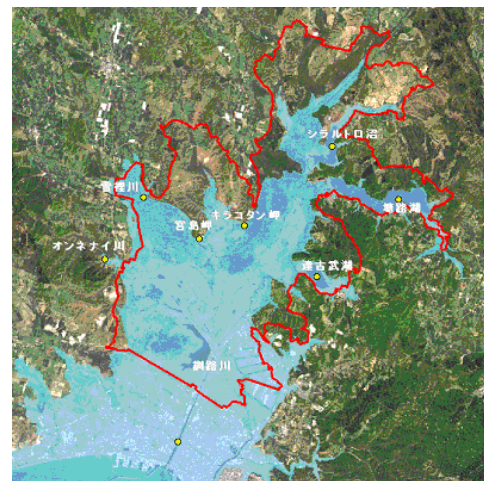
- 釧路湿原の地形は、南部（釧路市街地・太平洋方面）では東に、北部（鶴居・標茶方面）では南へそれぞれゆるやかに傾いています。全体として西から東・南東に向かって低くなっています。湿原に何本もの支流（ホロロ川・セツリ川・クチョロ川・ヌマホロ川など）を持つ釧路川は、一番低い湿原の東縁を台地に沿って南下し、太平洋にそそいでいます。釧路川の左岸には、台地にくいこむように海跡湖のシラルトロ沼・トウロ湖・タッコブ湖があります。



《イラスト：湿原データセンターHP より》

- 湿原の地質は、表面に泥炭をのせている第四紀の沖積層です。沖積層は湿原を直接作っている地層です。深さは、およそ20～40メートルで、湿原の南部や臨海地では深くなり50メートル以上最深で80メートル位あります。最上部の泥炭は、湿原の中央から北部にかけて3～4メートルで、全体で見ると1～4メートルの範囲です。

- 湿原の形成は、およそ2万年前のビュルム氷期末期からはじまったと言われています。当時は現在に比べて平均気温が10度近くも低く、海面は100メートル近く低下していた時代です。この氷期も徐々に衰退し暖かくなると海水が内陸に進入し、やがて6000年前頃には、「古釧路湾」が形成されました。



【水色部：古釧路湾】

《地図：湿原データセンターHP より》

- 鶴居村温根内

丘陵地斜面では多くの貝がみられ、かつて湿原が海であった事がうかがえます。



○釧路町岩保木

露頭の写真は、釧路川の河口から約 10km 上流の、釧路川を旧釧路川から切り替えた岩保木水門付近で、旧釧路川の築堤改修工事に伴い湿原に約 20m 四方に掘削された深さ 3m の壁面を撮影したものです。地表面から約 2m が泥炭層に覆われ、その下に厚さ 1m の砂礫層がみられます。この砂礫層の下部約 30cm には 6760 年～7000 年前の縄文海進最高期

に生息していた貝類の化石が多く見られました。これらの貝化石には現在の釧



路を中心とする道東沿岸地域では生息しない暖流系種がかなりの割合で含まれ、本地域の沿岸環境が、縄文海進最高期には現在よりかなり温暖であったことがわかっています。

○釧路町昆布森

釧路町昆布森海岸から釧路寄りに 20 分ほど歩くと、城山海岸があり、約 3800 万年前の古第三紀に堆積した数枚の地層が重なって岩石海岸を構成しています。昆布森から城山海岸に向かって、地層は西にゆるく傾いており、昆布森に近い方が古い時代に形成された地層になっています。昆布森側から、薄い石炭層が見られる雄別層、多くのシジミ化石が見られる双連層、「ハチの巣岩」と呼ばれる風食岩がある舌辛層が見られます。

雄別層は昭和 45 年に閉山した阿寒町の雄別炭鉱で採掘していた地層で、砂岩と泥岩とが交互に重なる地層が見られ、地層の間には薄い石炭をはさんでいます。砂岩と泥岩の境には時々波状の模様があり、現在の砂浜にも見られる模様で、さざ波の描いたものです。地層にも同じものが残されたもので、波の化石です。



双連層は黒い泥岩で構成された、数枚の石炭層をはさむ地層です。二枚貝のシジミの化石がたくさん見られますが、現在のシジミ（ヤマトシジミ）と少し異なり、シタカラシジミとトクダシジミの2種類が見られます。



舌辛層は砂岩や泥岩で構成されていますが、岩質から下部、中部、上部の3層に区別されています。上部層は浸食のため削られて釧路市付近では見られませんが、下部層は昆布森などに露われています。昆布森で見られる「ハチの巣岩」は、均質の粒できている砂岩が、強い風により海岸の砂を吹き付け、長い年月をかけ岩を削り取った風食作用でできた地形で、海に面した垂直に立つ海崖の岩肌一面に丸くくぼんだ穴がハチの巣状の模様が刻まれています。高さ 20m に及ぶこの風食岩は日本でも珍しい一大景観です。



○釧路市岩見浜

観察できる地層は、白亜紀層と古第三紀層の別保層、春採層、天寧層です。

白亜紀層は釧路では最古で最大の地層で、中世代の白亜紀の末期（約7千万年前）の海に堆積した地層から白亜紀層といい、他の地方の白亜紀層と区別するため根室層群と呼ばれています。



別保層は、古第三紀層の基底層で、れき岩を主体とする地層で、採石材として広く開発されています。

春採層は、主に砂岩と泥岩の互層で構成され、数枚の石炭をはさむ地層で、釧路の太平洋炭鉱で採掘していた地層です。釧路管内を中心として、釧路沖の海底を含む広い範囲に堆積しています。植物化石が多く含まれ、その中でもメタセコイアが最も多いことから、石炭をつくった植物のなかで、大きな位置を占めていたことがわかります。岩見浜の露頭は、安政3年（1856年）に江戸幕府が試験的に採掘した採炭地としても知られています。



○釧路市興津の海岸

釧路市の文化財に指定された（昭和 50 年 12 月 12 日）、春採太郎を見ることができません。春採太郎とは、海岸に面した崖面に露出している砂岩脈です。これらの砂岩脈は、釧路では知人岬から厚岸湾までの海岸に、大小百本以上あります。それらの岩脈の厚さは、一般に 10cm 以下で 1 m を超えるものはほとんど見られません。しかし、この春採太郎は幅約 4m、陸地と海底を合わせた延長が数 km、上下方向 300m に及び日本一の規模となっています。これらの岩脈は、石炭を含むことで知られる浦幌層群が堆積した後、地殻変動に伴ってできた地層の亀裂に、砂などが吸い込まれて形成されたと考えられています。

○釧路地方の地質層序表

1 万年	第四紀	沖積世	沖積層	
		洪積世	屈斜路軽石流堆積物	
			大楽毛層	
			阿寒火山古期噴出物	
200 万年 520 万年	新第三紀	鮮新世	阿寒層群	
		中新世	厚内層群	
			布伏内層群	
2500 万年	古第三紀	漸新世	音別層群	縫別層
				茶路層
				大曲層
		漸新世	浦幌層群	尺別層
				舌辛層
				双連層
				雄別層
				天寧層
				春採層
				別保層
6500 万年	白亜紀	根室層群		